

ゴルゴ13

2021. 11. 16

「ゴルゴ13」言わずと知れた人気漫画作品である。読んだことがない人でも、なぜか知っている作品であろう。インパクトのある主人公は、見たことがあるはずである。

以前から不思議だったことがある。いろいろな飲食店などに行くと、漫画本が置かれてあることがある。どんな作品が多いかという、私の印象では、一番が「ゴルゴ13」なのである。いったい誰が読むのか。昔はそう思っていた。

ところが、何気なく「ゴルゴ13」を手にしていて自分に気がついた。そうか、こうやって読む人が一定数いるということか。長年の疑問が解決したような気がした。若い頃は見向きもしなかったが、今では何となく読んでしまうことが多い。そして、読み出すと、一話完結型のため、読みやすい。次が気になって仕方がないというわけでもない。

何が魅力なのか。現実ではありえないだろう設定だろうか。暗殺者、スパイ、謎だらけの主人公であるデューク東郷、あまりにも現実にはありそうもないところがいいのかもしれない。私は、もともとスパイものは嫌いではない。「007」などは好きである。ストーリーもあるが、スパイへの憧れもあるのだろうか。男性は、ハードボイルドに憧れるものである。

ゴルゴ13ことデューク東郷、通称Gは暗殺者である。当然、非合法である。だが、悪いことをしているようには感じられない。そこもいいのかもしれない。Gの正体はバレそうできて、なかなかバレない。これは、よくある設定である。読者は、謎の人物に惹かれる。

作品の生みの親である「さいとう・たかを」さんが亡くなられた。1968年から連載中であり、コミック本は202巻を数える作品を世に出した人である。もはや伝説の人、レジェンドである。作品には、世界情勢や技術の進歩、社会問題が如実に反映されていた。その点でも、この作品が多くの人に与えた影響は大きい。

問題は、作品がどうなるかである。「ゴルゴ13」はさいとう・プロダクションが中心となり、連載が継続されるようである。果たして、さいとう・たかをさんの類まれな想像力を継承できるものだろうか。作品の今後の展開を注視していきたい。

作品には、ゴルゴ13ことデューク東郷による名言が出てくる。例えば「誇りは気高いが過剰になれば傲慢だ」あるいは「俺はウサギのように臆病のせいで、こうして生きている」他にも「子が生まれたら犬を飼うがいい。犬は子より早く成長し子を守ってくれるだろう。そして子が成長すると良き友となる。子が青年となり多感な年頃に犬は死ぬ。犬は青年に教えるのである。死の悲しみを」

これからも、何気なく読む「ゴルゴ13」を楽しみにしたい。